

病害虫防除指導報

安心のネットワーク

NOSAI

第370号

令和5年6月26日

発行

秋田県農業共済組合
北秋田山本支所

☎0185-54-5540

病虫害の特徴と対策方法・時期について

1. いもち病（葉いもち）

葉いもち防除（育苗箱施用剤・側条剤・水面施用剤）を使用していない場合は、直ちにオリゼメート粒剤2kg/10a、又はルーチン粒剤1kg/10aを散布しましょう。

余り苗や水田内で発病を確認した場合は、直ちに予防剤と治療剤の混合剤（ノンブラス剤又はブラシン剤）の茎葉散布を行います。これまでに葉いもち防除剤を使用している場合でも、速やかに茎葉散布を実施し、その後、必要に応じてビーム剤の追加散布を行いましょう。なお、成分のトリシクラゾール（本田）及びフサライドの総使用回数はいずれも3回以内なので注意してください。

【葉いもち防除剤】

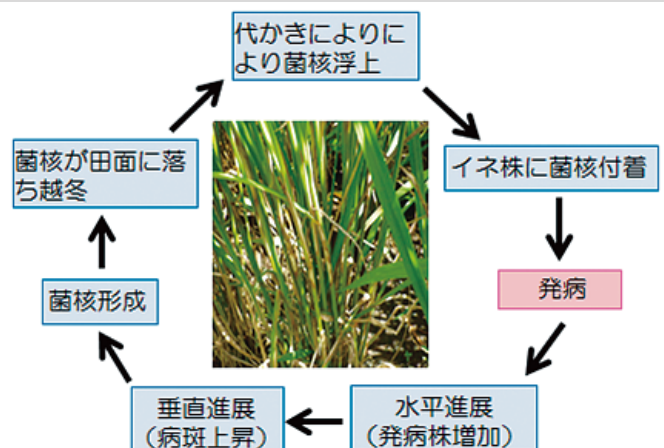
農薬名	薬剤の種類 (成分名)	剤型			散布量（10a）又は 希釈倍数【散布液量】
		粉剤 DL	ゾル	フロアブル	
ノンブラス	トリシクラゾール フェリムゾン	○		○	粉剤DL：3～4kg
ビーム	トリシクラゾール	○	○		フロアブル・ゾル： 1,000倍【100～150L】
ブラシン	フェリムゾン フサライド	○		○	

2. 紋枯病

前年多発ほ場は注意が必要です

紋枯病は前年に発病した病斑の菌核が水田内に落ちて越冬し、その菌核が7月下旬に稲株に付着して発芽します。また、出穂の早い年や出穂後高温多湿の気象条件では上位の葉鞘まで病斑が進展しやすいです。前年の収穫期に発生が多かったほ場などでは特に注意してください。

紋枯病の発生生態



紋枯病は発病したら必ず減収するわけではありません。穂ばらみ期～出穂期の発病株率が15%を超える場合は減収のおそれがあるので、出穂直前～穂揃期に茎葉散布剤による防除を行います。粒剤の散布時期は茎葉散布剤よりも早く、前年多発したほ場では、出穂15～5日前にリンバー粒剤、又は出穂20～10日前にモンガリット粒剤を散布します。また、本年多発したほ場では、翌年に有効な成分を含む育苗箱施用剤も検討します。

【薬剤による防除法】 発病株率が15%以下の場合は、防除の必要はありません。

	農薬名	散布時期	散布量(10a)又は希釈倍数	備考
茎葉散布剤	バンタック バリダシン モンカット モンセレン	出穂直前～ 穂揃期	粉剤・DL 3～4kg 液剤 1,000倍 ゾル 800～1,000倍 水和剤 1,000倍 フロアブル 1,500倍	1) 出穂直前の防除に重点をおく。 2) 多発が予想される場合は出穂以降にも散布する。
水面施用剤	モンガリット粒剤 リンバー粒剤	出穂20～ 10日前 出穂15～ 5日前	4kg	1) 使用は、前年多発したほ場に限定。

注1) 薬剤によって散布時期が異なります。
注2) 茎葉散布剤は株元に到達するように散布します。
注3) 粒剤は湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は入水しない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしないでください。

3. 稲こうじ病

稲こうじ病は年次や作型にかかわらず同じほ場に発生しやすい傾向があります。稲こうじ病菌は、本病が発生した水田の地表で越冬し、移植後のイネの根に侵入し、生長点に進展します。その後、穂ばらみ期に降雨で葉鞘内が多湿状態になると、局在していた病原菌が幼穂に侵入して、出穂後に発病します。



稲こうじ病

〈防除対策〉

- ①薬剤による防除適期は出穂の20～10日前です。
- ②発病が確認できる出穂後の防除対策はないので、予防防除に努める必要があります。
- ③前年多発したほ場は本年も多発する可能性が高いので、散布が遅れないよう適期に防除しましょう。

【薬剤による防除法】

農薬名	散布時期	散布量(10a)又は希釈倍数(散布液量)	散布回数	備考
ドイツポルドーA ポルドー	出穂20～ 10日前	2,000～4,000倍 (100～150L)	1回	・高濃度で散布すると薬害を生じやすい
トライフロアブル		1,000倍 (100～150L)		・テブフロキン剤の総使用回数2回以内なので注意する
Zポルドー粉剤DL		3～4kg		・高温時には薬害を生じやすいので夕方の涼しい時に散布する
モンガリット粒剤		4kg		・湛水状態で田面に均一に散布し、散布後4～5日間は入水しない。また、周辺環境に配慮し、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

4. コバネイナゴ

7月上旬からの発生状況に注意しましょう

コバネイナゴ成虫の体長は雄16～33mm、雌18～40mmとされ、体色は全体に黄緑色、背面は黄褐色、頭部複眼の後ろから前胸部にかけて黒褐色の縦条が走っています。体長や体色はかなりの個体変異がありますが、前翅端が腹端より短いものが多く、これがこの種の特徴とされています。幼虫は全身黄緑色で翅がありません。

コバネイナゴは年1回の発生で、卵のふ化は5月下旬頃から始まり、7月上中旬までの長期にわたります。ふ化した幼虫は畦畔や農道の雑草、畦畔沿いの稲を食害し、発育が進むにつれて水田内部に侵入し、老齢幼虫が多くなる7月下旬頃にはほ場全体に均一に分布します。大部分の幼虫は5～6齢で老熟し、8～9月に成虫となります。

葉や穂を食害しますが、特に問題となるのは出穂後の加害で、登熟歩合、千粒重などを低下させ、収量、品質に影響します。



コバネイナゴの成虫

〈防除対策〉

- ①要防除密度は株当たり0.5頭以上(穂ばらみ期まで)ですが、これは捕虫網による20回振りのすくい取りで100頭に相当し、これを目安に防除を行います
- ②防除が必要な場合は7月上旬～下旬までに、茎葉散布剤を畦畔を含めて散布します。

【薬剤による防除法】

農 薬 名	散布量 (10a) 又は 希釈倍数	散布量 (10a)	散 布 時 期
トレボン粉剤DL	3 ~ 4 kg	—	7月上旬~下旬
トレボン乳剤 トレボンEW	1000 ~ 2000 倍 1000 倍	100 ~ 150L	

5. フタオビコヤガ (イネアオムシ)

7月上旬からの発生状況に注意しましょう

フタオビコヤガの幼虫はイネアオムシと呼ばれています。幼虫は緑色をしていて、約2cmまで成長します。成虫は体長約1cmの小さな蛾になります。フタオビコヤガは年3回発生（5月末~6月上旬（第1世代）、7月上旬（第2世代）、8月上旬（第3世代））し、第2~3世代の幼虫が多発するとイネに大きな被害を与えます。また、出穂前のイネが上位葉に大きな被害を受けると登熟が悪くなるおそれがあります。



フタオビコヤガの幼虫

〈防除対策〉

- ①第2世代幼虫期（7月上旬）と第3世代幼虫期（8月上旬）が主な防除時期にあたります。場ごとに発生状況を確認し、防除を行います。
- ②第2世代では7月上旬に上位3葉、第3世代では7月下旬~8月上旬に上位2葉を調査し、いずれも食害株率が100%で食害度が25を超えた場合は、直ちに防除します。
- ③例年多発するほ場では、来年に有効な成分を含む育苗箱施用剤も検討します。



フタオビコヤガの食害

【薬剤による防除法】

農 薬 名	希釈倍数	散布量 (10a)	散 布 時 期
チューンアップ顆粒水和剤	4,000 倍	100L	第2世代：7月上旬
トレボン粉剤DL	—	3 kg	第3世代：8月上旬
パダン粉剤DL	—	3 ~ 4 kg	